第3回五條市西吉野ふれあい文化祭を開催します

■日時　3月1日(土)・3月2日(日)
■場所　西吉野コミュニティセンター、白銀南体育館、白銀南公民館

発表の部門

▽1日午後1時から　カラオケ発表
▽2日午前9時から　町内保育所・幼稚園の発表、群読、舞踊、大正琴、詩吟、コーラス、囲碁、お茶席等

展示の部門

▽1日・2日の2日間
工芸、手芸、生け花、盆栽、書道、トールペイント、町内保幼小中作品の展示等

企画の部門

▽2日のみ
模擬店(ドーナツ、当て物、草もち、ぜんざい、手作り石けん、小物、ヨーヨー、ジュース、フランクフルト、ご飯、コーヒー、おでん、たこ焼、炊き込みごはん、中華ちまき、ネギ焼等)

そ　の　他

▽1日・2日の2日間
健康づくりコーナー　パネル展示

■問合先　五條市西吉野ふれあい文化祭実行委員会事務局　西吉野支所住民課内　㊥(内線25)

新町と松倉豊後守重政

まつくら ぶんごのかみしげまさ

「近世の新町」－歴史的雄都の五條－

司馬遼太郎(『十津川街道』)の言葉を借りれば、近世の五條は「奈良に次ぐ都市」であり、「大和における歴史的雄都」でした。一方、当事者の新町・五条の人々は、「諸品交易人馬往返」の宿場町で、「河州(河内国)・紀州之国境にて紀州より勢州(伊勢国)其外えの往還宿場」・「紀州国境の咽喉(のど)首」・「大和国の儀、奈良は首分、五條は尾」の位置にありその役割を果たしているのだと自己認識し、自覚していました。

丁度400年前の1608(慶長13)年、松倉豊後守重政が五条村と二見村の一部を分割し、商人を各地から誘致して新町を創立しました。二見城の城下町・伊勢(高野)街道沿いの宿場町・商業の町などの機能を併せ持った、以前とは異なった近世的な町場として出発することになりました。その後、建前上(法的に)は各村であり別々の行政的位置づけがなされていた五条(村)・二見(村)・須恵(村)・新町(村)などと有機的な繋(つな)がりを持った在郷町として発展し、この地域は「歴史的雄都」となり、現在の五條市の基礎が作られることになります。この近世的な町場として発展した新町の様子や特色を、暫(しばら)く松倉重政よもやま話から離れて、眺めてみようと思います。(典拠:『柏田家文書』)

現代もそうですが、都市の特色の一つは、人の移動が頻繁であることです。近世の新町周辺も人の移動が結構ありました。右の一覧は、文化13(1816)年～弘化4(1847)年の約30年間の新町への五条・二見・須恵からの移住126例の内訳です。平均すると、この三か村からだけで毎年4例の移住があったことになります。引っ越しと合宿(あいやど)は全体の53.2%にもなりますが、これらの大半は仕事や商売の関係からの転入だと考えられます。結婚・養子縁組も多いですが、それぞれの家業を継続させ、発展させようとする新町の社会の意欲やエネルギーを感じさせる数値だと思われます。分家の場合も、元の本家の家業に一定の力があるから可能であり、新町にもそれを受け入れる地盤があったからだと思います。新町は、計画的都市で、創設当初の93～94棟の家並み以外に家を建てるような広い田畑や自然原野を持っていませんでした。別の史料によると天保2(1831)年においては、世帯数約160戸、人口約680人の規模です。この規模の町で、30年間で126例の転入例はかなりの頻度ではないでしょうか。そして、町の範囲が決まっている以上、これだけの転入があるということは、新町からの他地域への転出者も同程度に存在したということです。19世紀ごろの新町村・須恵村・五条村・二見村はそれだけ結びついていたのであり、都市的な地域だったのです。ただ、移住元の大半の83.3%が五条村であるということは、特に新町・五条は、町場として相互補完的な役割を特に果たしていた、あるいは一体化が進んでいたのだと考えられます。では、五条村・二見村・須恵村以外との関係はどうなのでしょうか。和歌山方面との結びつが結構大きいのですが、この点については次回とします。

【新町への移住一覧】(1816～1847年)

元の村	・五条村から	105例 (83.3%)
	・須恵村から	16例 (12.7%)
	・二見村から	5例 (4%)
移住の理由	・引っ越し	54例 (49.5%)
	・結婚	26例 (23.9%)
	・養子、養女	12例 (11%)
	・分家	5例 (4.6%)
	・合宿	4例 (3.7%)
	・離婚	3例 (2.8%)
	・帰村	2例 (1.8%)
	・その他	3例 (2.8%)
	・不明(記載無)	17例
計	126例(不明は除く)	

(新町と松倉豊後守重政400年記念事業実行委員会委員　藤井正英)